

新生

村落を
縄張りにして
百舌高音
小富士



東北新生園入所者自治会

平成二十七年九月二十日発行

新生第六十七巻 第三号

新生

平成二十七年九月二十日発行

第六十七巻第二号

東北新生園の概況

所 在 地	宮城県登米市迫町新田字上葉ノ木沢1番地
土 地 面 積	351,291m ²
建 物 延 面 積	25,280m ²
開 園	昭和14年10月27日
医療法承認病床	244床
標榜診療科	内科、外科、皮膚科、眼科、耳鼻いんこう科、歯科
現在入所者数	男33名 女47名 計80名
職員定員数	153名(平成27年4月1日現在)
園 長	医学博士 横田 隆

東北新生園交通案内図



三遊亭遊馬師匠独演会

— 平成27年7月3日 —



平成26年度文化庁芸術祭
大賞受賞記念
三遊亭遊馬師匠による独演会



古典落語をご披露
頂きました



花束贈呈

園内日誌

【謝寄贈図書欄】

平成二十七年 四月～六月

四月

七月 作業者慰安旅行（松島方面）

二十一日 楓会観桜会（抽選会）

二十九日 春季バス旅行（松島方面）

五月

二十二日 山形県健康福祉企画課訪問

第三十二回高松宮記念杯
近隣親善ゲートボール大会
(五十チーム参加)

六月

二十六日 山形県バス旅行（松島方面）

平成27年9月10日 印刷
平成27年9月20日 発行

発行 東北新生園楓会(自治会)
編集 楓会文化部
印 刷 川内印刷株式会社

〒989-4601

宮城県登米市迫町新田字上葉ノ木沢一
東北新生園 電話 0228(38)2121代
発行所 東北新生園入所者自治会 電話 0228(38)3600



新生文芸	詩
川柳	俳句
遊びの今昔	短歌
化け猫の話	
園内日誌・謝寄贈図書	

カイツブリ観察記	園長 横田 隆
よろしくお願ひ致します	看護助手 山田 たかみ (9)
よろしくお願ひします	調理助手 佐藤 里夏 (11)
一期一会	調理助手 片桐 栄子 (12)
	調理助手 伊藤 かつ江 (13)

新生・第六十七巻第三号

目次

表紙：「百舌」

桃生 小富士

選者	長山 佐々木
選者	春山 長
選者	谷石 田
選者	小信 隆
蝶子	裕子
(27)	(23)
蝶子	子
(21)	(19)
蝶子	晃道
(20)	(18)
蝶子	一洋
(21)	(14)

カイツブリ観察記

園長横田 隆

ある日の事でございます。園内の池の周りを散策していると、湖岸に近い所に、妙なものが浮いているのに気づきました。木の枝を重ね合わせ、池に浮かぶ鳥の巣を発見、しかも中に真っ白な卵が五個あつたのです（写真1）。早速、福祉課の係長、M.S.W.にそのことを知らせると、すぐに二人で見に行つて、もどつてきて、「水鳥の巣に違いない…」と興奮して話していたものでした。親鳥の姿が見えないので気になりましたが、その後、三四日後に、職員より、「巣が水没しかかつて

いるようだ」との連絡。早速、行つて写真を撮り、自治会の久保会長に報告しました。久保会長からは、すぐには救助した



写真1：初めに発見した水鳥と思われた巣と卵。真っ白いのが印象的。この後水没。

方がよいだろうとのこと、その後、職員からは、完全に水没し、卵は池の中に消えていつたところで、自治会長から言われたときに、すぐに救い出し、孵化器に入れていれば…などと大変後悔したのでした。五つの命を救助できなかつた悔いが残りました。危機管理上、大いに反省すべき点がありました。

それから二ヶ月。また、池の周りを散策していると、水没した巣が新築されており、その上に鳩よりも一回り小さい水鳥がちよこんと座っているではありませんか！全体は焦げ茶色で、頸から背中にかけてはオレンジ色に染まり、クチバシの下は白く縁取られていました。目はまん丸で、白目の部分の中心にこれまでまん丸な黒目がぱつりとあり、表情に乏しい、何やら冷徹な印象さえ受けます。池の畔に走つて近寄ると、すぐに巣から水の中に潜り、そのまま消えてしまいました。よほど人間が恐いのでしょうか。どこへ行つた…と

現在、卵を抱いているのであれば、今度こそはちゃんと雛を孵してあげたいし、ともか



写真3：親鳥から餌をもらう雛。

(写真2)、親鳥の羽の中に隠れたり、また出てきて親にじやれついたり、餌をねだるような仕草をしたり、それこそ、ずっと見ていて

くはあまり人が近づかないようにしなければ、とも思い、道路閉鎖も考えましたが、これは入所者の利便性を損なうことで、現実的ではありませんでした。施設管理主任が、「車で通ればあまり警戒しませんよ、写真も撮ることが出来ました」との報告で、私も車を畔に横付けし、窓を静かに開けて、巣をのぞき込みました。カイツブリは、車を人間が運転しているということを認識出来ないようです。車の窓から腕を出して、デジカメで撮影しても、ビデオを撮つても、警戒せず、巣から離れることもしません。毎日早朝、車で密かに巣に近づき、撮影していました。つがいで卵を温めているようで、母親だけでなく、父親鳥もちゃんと孵化に協力しているようで、時間で交代しているようでした。卵を温め出してから二十五日ほど経つたある日、土曜日の日当直明けで、帰るか…と思い、その

も飽きない憧憬でした（写真3）。母親鳥が巣で雛を羽の下に抱えている時は、父親鳥が餌を運んできます。餌は池に多く生息する、このあたりでは「黒つこ」と呼ばれる小魚で、親鳥は池の中に潜っては巧みに捕らえて来て、雛に与えていました。この小魚は、以前、池に専用のワナを仕掛け、沼エビと共に私が捕まえては、入所者の愛玩用に水槽に入れて、不自由者棟に展示していたものでした。沼エビは、よくよく見ると脚が沢山あり、動きを見るとそれは興味深いもののですが、よくびょんびょん跳ねて水槽から脱走します。気づいたときは干からび、評判がよくありませんでした。黒つこも、綺麗でなく可愛くないと言う理由で、金魚に取つて代わられ、寂しい思いをしたものでした。黒つこ、沼エビなど、池には、カイツブリの餌が豊富にあるのだろうと想像されました。



写真2：卵は焦げ茶色で、生まれたての雛が巣の端にいる。

その後、雛は次々と孵り、合計五羽が生まれました（写真4）。前回、水没して悲しい最期をたどった卵が五個であったことを考えると、“生まれ変わり”的にも思え、これ



写真4：全部で5羽のカイツブリの雛が孵った。



写真5：少し大きくなった雛。まだ親の羽の下に潜り込もうとしている。

生まれてから四週目になると、雛たちは自分で素潜りが出来るようになります。魚を捕っているかどうかは定かではありません。

まだ、親鳥が捕つた魚を食べさせてもらつてゐる段階かもしません。

カイツブリが飛んでいるところを見たことはありません。飛べないのか、飛ぶのは苦手なのか：どちらかなのでしょう。陸地に上がることはありません。陸地には野良猫やカラス、ハクビシンなどの天敵があるので、それは危険なのでしょう。幸い、池にはブラックバスなどの獰猛な魚はありませんので、一生、池の上で生活していれば、安全なのだろうと思われました。今は蓮の花も咲きかけており（七月初旬）、大きい蓮の葉はカイツブリが身を隠すには絶好のものでしよう。

冬にはこの池には白鳥が三十羽くらい飛来します。以前は、パンの切れ端をパン屋から安く分けてもらい、餌付けをしていましたが、鳥インフルエンザ騒ぎで、餌付け禁止となってしまいました。カイツブリは自分で生きた魚を捕らえてくるので、餌付けは出来ないで

れば園全部で大事に、大切にしてあげないと…と思つたものでした。

雛たちは生まれてからすぐに移動出来るようで、水の上なら上手に泳いでいるようですが、蓮の葉の上を歩く時は、よちよち歩きで見ていてちょっと心配になります。転んで頸を痛めないだろうか、足を捻挫しないだろうか：などと親になつたような心境になります。しばらくすると、水の動きもスムーズで、速度も親と変わらずすばやく動けるようになりました。雛は五羽いるので、父親鳥が三羽、母親鳥が二羽を連れて、時々、潜つては餌を与えていました（写真5）。両親が揃つて子育てをするのは、人間も大いに参考にしないといかんなあ：と思ったものでした。冷徹そうに見えた親鳥の表情も、雛が生まれてからは柔軟な顔になつたようで、卵を抱えていたときはマタニティーブルーになつていたのでしょうか。何ともいじらしい親鳥です。

しよう。少しでもカツブリの食生活に寄与できればとも思いますので、餌付けできないのは少し残念ですが、自然界の生き物はただただ見守るしかないのかもしれません。

下流の方にあるもう一つの池にも最近、カツブリのつがいを発見しました。中央に巣があり、あまりに遠く、観察出来ないので、詳細は不明ですが、こちらの雛とあちらの雛同士が親しくなり、また家族となり、大いに発展していくほしいと心から願つているところです。

よろしくお願ひ致します

看護助手 山 田 たかみ

目にした柘榴の実の印象と共に深く私の記憶の中に刻まれ、半世紀近く経つた今も尚忘れられない思い出です。

こちらに採用して頂いてからあつという間に二ヵ月が経ちました。不慣れで心許ない私の仕事ぶりを、幼い頃の記憶そのままの温かい笑顔で見守りながら優しい言葉をかけて下さる入所者の皆様と一緒に過ごす時間を与えて頂いたことに感謝して日々を過ごしております。

今はまだメモとにらめっこしながら業務を行う毎日で、至らないところばかりの私ですが、先輩スタッフの方々には細かいことまで一つ一つとても丁寧にご指導頂き、本当に有り難く思います。失敗を繰り返し、ご迷惑をおかけしてばかりの自分が情けなくなる時もありますが、そんな時も励ましの言葉やさりげないフォローを頂き、感謝の気持ちでいつも頂いた教会の佇まいと、生まれて初めて



ぱいです。

これからもご指導を仰ぎながら、スタッフの一員として、入所者の皆様が笑顔溢れる快適な毎日を過ごされるお手伝いが出来るよう努めて参りたいと思っております。入所者様、先輩スタッフの方々から私が日々頂戴している優しい思いやりに応えることができるよう頑張りますので、どうぞよろしくお願ひ致します。

よろしくお願ひします

調理助手 佐 藤 里 夏

しています。仕事をしていく嬉しく思つた事が多々あります。

配膳車を下げていると、入所者の方から「もう、仕事は慣れましたか」と声をかけてもらいました。私の顔を覚えて下さったのだと思い笑みがこぼれました。又、ある日は「今日は麺の日ですね」と給食を楽しみにしている方とお会いできました。

猛暑の日に声をかけて下さった看護師さんは「今日は暖かいですね」と和らぐ表現で私の気持ちも穏やかになりました。

これまでとは違った新しい分野への仕事になりますが、思いやりの気持ちを忘れずに、真心をもつて美味しい食事を届けたいと思います。

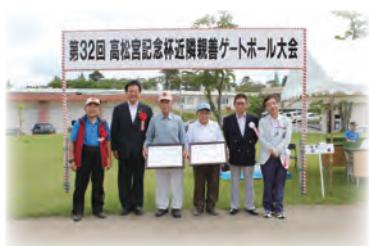
どうか、今後ともよろしくお願ひします。

第32回高松宮近隣親善 ゲートボール大会

—平成27年6月26日—



選手宣誓：昨年優勝
仙台B&Bチーム



最高齢者賞受賞の選手



今回優勝の仙台中野栄チーム

よろしくお願ひします

調理助手 片倉栄子

先日、ある番組を見て「私は作った人が喜んでくれるような、物の使い方をしているのだろうか?」と考えさせられました。メードインジャパンの道具を、世界の職人たちが高く評価していることを伝える番組でした。

四月から東北新生園・栄養班にて勤務しています。私は栗原市瀬峰町出身です、現在は大崎市古川に住んでおります。

子供が4歳と小さいため、私自身ついつい念のため、必要かもしないといろいろな物を購入してしまいます。

食器・文房具・食材・雑貨。

部屋中見渡すと、気軽に買って飽きればまた新しく買った結果「物」が多いことに驚きます。

日本の職人は、自分が生み出した道具が遠く離れた地で大切に使われていることを知つて、涙を流していた。「使い捨て」が当たり前の時代に、物の作り手と使い手が互いに尊敬し合う姿に心を打たれた。

これまで私は、当面使わない品をしまい込むことに何の疑問も持たなかつたが、しかし、それは「物を大事にする」のではなく、「物に役目を与えない」ことだと気付いた。

たとえ、職人が作つた逸品でなくとも、私たちが手に取る物一つ一つは、世界誰かが手間と時間をかけて作られています。

今後は、心して使おうと思う。

一期一会

調理助手 伊藤かつ江

前の職を離れるにあたつても、たくさん人と出会い、関わりを持ち楽しく過ごさせていただけました。

私は若い頃、人と接することを、煩わしく思える時もありました。でも、一人で生きることも難しく、そして何よりも関わりを持つて、笑っていた方が楽しいと思えるようになりました。皆さんに助けられているなと思えるんです。私にとって、一握りの出会いは:とても貴重なものになつています。

こうして新生園に勤務することになり、新たな一期一会を刻むことを楽しみにしています。どうぞよろしくお願ひします。

たぶん、私の人生の中で、こうして皆さんと出会えたことは、一期一会なんだろうなと思えます。私は、たくさんの人とこの年まで出会えたと思っていますが、登米市に生まれて登米市で暮らしていく私にとっては、日本や世界からみたら、ほんのわずかな一握りでしかないと思います。

詩

佐々木 洋一選

◇入選◇

『ミニトマト』 今野きよし

メープル寮
総出で植えた
ミニトマト
大きくなつて
葉色青々
見とれるばかり

スタッフの
手入れはまめに
行き届き
みんな集まり
眺め込む

トマト見られて
恥ずかしそうに
照れている
背丈高く
伸びやかに
節々に

びっしり鈴生り
実を付けて
恥ずかしそうに
葉陰に隠れて
トマトだんだん
大きくなつて
大葉の陰に

◇佳作◇

『浜は大漁大賑わい(一)』

北辰一硯

古里を離れて六十四年
父も母も亡くなつて
いる
入園当時はまだまだ
食糧が不足して
サツマイモ二本が昼食として
配られた事があった

ミニトマトを囲んでうきうきしている様子が印象的で、あたたかく初々しい作品である。手だれている作者独特な持ち味が活きてているが、時には冒険もしてほしい。

『ミニトマト』

今野きよし

青い実
赤い実
熟れている
挽いでくれると
こちらを向いて
見つめてる
ミニトマト
人の気持ちを
良く汲んで
今が食い頃
召し上がる

【選評】

そんな時思い出すのは
古里の海である

鷗の声波の音潮騒を予守唄として
育つた蒼い海が振り籠であり
波間に漂う鷗になつてている私が
見えて来るのである

松風も海の匂いもなく鷗の賑やかな
歌声も消えて何も聞こえぬ
世界に迷い込んでしまつた

そんな思いで生活するのは耐え難く
あの岬この島々あの岩場この磯辺
あの友この友達と釣りをし海で戯れて
遊んだ楽しい遠い日が
走馬灯のように
浮かんでは消え
浮かんでは消えてゆく

春は海草のシーズンであり

若布、昆布

海苔、ふのり、まつも、ひじき

天草等々角又は漆喰の材料になる物

である

今のように何も彼も養殖でなく

天然その物であり

岩場岩場を小舟で渡り

潮の干いでいる間に手で摘み取り

鹿尾は小さな鎌で刈り
天草は五本指のような鉤で搔き取り
若布は三メートー位の細長い棒の
先端に鎌を付けて棒振り振り
若布を小舟一杯になるまで刈り上げ
岩場に波でぶつからぬように
小舟を二人で操り真ん中の人人が
若布を刈り取るので三人の呼吸が
合わないと揃らないので
苦労するのだ

天干しなので女人達は

目が廻るほど
多忙であり一日で干し上げないと
品質に差が出るのである

海草取りと相俟つて
メロード、シラス、イサダ漁も
始まり初夏を迎えて
鯛、鯖、鰯等々小魚類の餌を求めて
黒潮に乗つて鰐が金華山沖まで

回遊して来るのである

他県の鰐一本釣の船も沢山集り
港々は鰐の水揚げで祭のように
賑わい夏漁が軌道に乗つて

三陸の海は

豊穣である事を知らしめている

大漁旗を靡せ鳴を率き連れ

鰐船が港を目がけて威風堂々
白波を蹴立てて突進して来る風景は
迎える人々の顔は綻び胸の高鳴りを感じることは海で育った人だけの
特権であろう

子供の頃は誰もが船長さん
機関長さんに成るんだと
夢を描いていた

三陸の各港は鰐一色になり
小さな浜にも
鰐が水揚げされ活氣づき

その頃の父も母も浜人みんなが
裕福で偉せだった
私の網膜に消える事なく
あの蒼い海が限りなく
青い空へと繋がっているのです

短歌

長田雅道選

◇入選◇

北辰一硯

初鰹友に感謝し頂けば七十五日長生きせしを覺ゆる

【選評】

初鰹を送つて下さった友人への感謝の気持ちがよく表現された良い歌である。初鰹を食べると七十五日長生きするという言い伝えがあるのだろうか。一首の中によくおさまっている。

◇佳作◇

北辰一硯

再稼働の話し出る度にフクシマの悲惨さ悲しさ思いやらねば昔巨人今楽天を応援し選手の特長今だ覚えず

草木の清めし空氣そよそよと入り来る部屋に憩う幸せ

【選評】

「草木の清めし空氣」はうまいと思う。適切な表現だと思う。その空気が通う「部屋に憩う幸せ」とまとめているのもうまい。生活の中に歌の素材は無限にあると思わせた一首だ。

今野きよし

故郷の墓を处分し骨拾い新墓地に埋葬したいと話す弟
リハビリに通うたのしさ感じつつクイズの問題解けてうれしき
難問奇問トンチ問題解きかねて助けを貰う頭の体操

今野きよし

◇入選◇

園永泊

俳句

山田桃晃選

ケシ坊主うつむいており終戦日

【選評】

瞿粟坊主が風にゆられる姿はどことなくユーモラスな趣が見られる。ことに揺れの激しい時がかなしくらい俯むく。何を考えているのだろう。国破れた日の瞿粟坊主は強い。

せきこみて夜中に目覚め汗ばみし肌着取替えのどの落ちつく石橋を叩いてですと声かけて看護師さんが見ててくれる窓開けてチューチューと聞こえるかわいい声の小雀鳴けり

山吹を愛でて健やか老夫婦 今野 きよし

◇佳作 ◇

【選評】 新じやがに笑顔が見えてくる夕餉

今野 きよし

【選評】

我が國固有のもので古く万葉の中にも歌が見える八重山吹などがある。

偕老なればこそ愛の心が山吹を生き生きと躍動させている。これからは不老不死の若さが見える「花は咲けども」ですね。

御歌碑一段高く涼しけり
洞窟の遺跡を巡る苔の花
瑞巖寺うつそうとして苔の花
瑞巒寺高床作り涼しけり

故郷の山野が浮かぶすすきの穂 園 永 泊

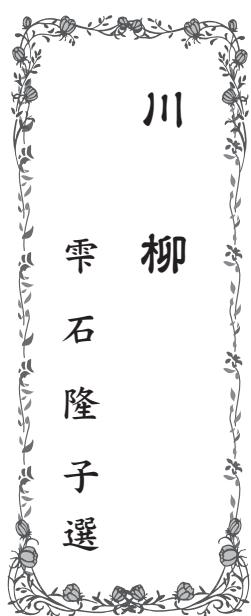
【選評】 生まれ育ったころの山や川広々とした野原での摘草、指を切りながら遊んだ芒原が季節のうつり変りが早い幾年になつても懐かしい穂芒の甘だるい香りが身にしむ。

香水にカバーされてるナースかな
ふと絵筆とりたくなるやあやめ花
かなかなや眼底の故郷巡り来ぬ

今野 きよし

【選評】

故郷の山野が浮かぶすすきの穂 園 永 泊



『地位』 桜山南仙
地球が荒れる神や仏の不満かや

【選評】

猛暑の日が続いていますが、梅雨明けの前の台風などで各地は大きな被害に見舞われたようです。このところ世界規模での異常気象は、人間たちの所業の結果か、と畏怖の念が作品になりました。

◇入選 ◇

【人位】 長沼蓮花

『天位』

新じやがに笑顔が見えてくる夕餉 桃生小富士

【選評】

旬のジャガイモを食卓にのせる。初物を食べると長生きをする?と俗に言われていますが、家族思いの優しさを作品にしたと思います。新じやがが囁む笑顔が見えてきました。

【選評】

仏壇の前に座り、静かに手を合わせる。こころ休まる時間でもあります。お灯明の揺れに、先祖を感じた一瞬でもあります。祈れば目前に答えがある。

これもご先祖様との縁なのかも知れません。

◇ 佳 作 ◇

長 沼 蓮 花

思い切り転職という友強し
生活の中にヒントが眠つてた

今 野 きよし

ハイタツチカ強くて倒れそう
つまみ食いそと見られて汗を搔く
そうですか素直に言えずもどかしい

桜 山 南 仙

ワンカップ俺をだまして早寝する
人の世に見たり涙の裏表



ボウフラのダンス始まる雨上がり
終活へ断捨離少しずつ始め
法名を頂き自分見詰めてる
桃 生 小富士

遊びの今昔

看護助手 熊 谷 信 裕

進むのです。まずは砂利道（当時、舗装されている道は国道くらいでした）で「光る石探し」をします。普段は石英しか見つからなかつたのですが、まれに水晶が見つかることがあります。その水晶はもちろん宝物になりました。現在はほとんどアスファルトで舗装されてしまったので、みつけるのは難しくなつたのが残念です。

私は中学二年生の娘がいます。毎日学校の勉強、部活、塾など、忙しく過ごしております。私が子どもの頃のように、学校が終わってからの寄り道も出来ないようです。今の時代、仕方ないことなのかもしれませんのが可哀想に思います。

私が子供の頃は学校からまっすぐ家に帰つたことはほとんどありませんでした。家に着くまで楽しいことがいっぱいです。友人と二人で一時間かかる距離を二時間以上かけて

通学路は田んぼ道でしたので、当然ながら用水路も私達の遊び場でした。筏舟を浮かべて競争、筏がない時はその辺にある枝や草など何でも浮かべて流しました。それだけで楽しいのです。また、用水路の中には大人が筏枝や塩ビ管を仕掛けていることもあります。これを道路に引き上げるといろんな生き物を簡単に捕まえることが出来るのです。「メダカ」「フナ」「ヒジょう」「ザリガニ」「ヤゴ」「タガメ」「ゲンゴロウ」などなど。捕まえれば

満足だつたので結局はすぐに用水路に逃がしていました。水がきれいで生き物が元気に動き回っている用水路は、まさに「自然の教室」でした。

夏休みは一日中遊べる大きなイベントです。一日の始まりはやはりラジオ体操です。最近はラジオ体操をしていない地区もかなり多くなつてきているのですが、私の場合、特に用事がないときは毎日参加してました。ラジオ体操のためというより、その後に遊ぶのが目的でした。「鬼ごっこ」「缶けり」「影ふみ」「ドッヂボール」など朝食を待つている親が怒つて迎えに来るまで遊んだものです。

さて、朝食を食べたらまた遊びます。公園のような遊び場はありませんでしたので、いつも山の中を探検し、今考えるとぞつとすることもしていました。なかでも十メートルくらいの崖を登つたり降りたりしていたことは

秋になると米の収穫後のわらを焼いて出る煙のなかを下校します。

私たちは落ちている稲穂を探し、火が弱くなつたところに置いて「ドンがし」のようなものを作つて食べていました。もちろん砂糖をからめることなくそのまま食べるのですが香ばしくてとても美味しいです。今では田んぼで煙が上がつているのを見ることが少なくなりました。

このように、子どもの頃の私のまわりにはいつも自然があり、その中で遊ぶのが当然でした。それしかなかつたともいえますが、みなさんもそれで十分でしたよね？

竹とんぼを作つて遊んだ人も多いと思いますが、今ではラジコンのように操作し上空から動画を撮影できるものがあります。最近何かと騒がれている「ドローン」がそれです。安いものでは一万円を切るものから高いもの

あまりにも無謀なことだつたと思います。自分の子供には絶対にさせません。当時、親が山に入るのを反対していた理由が今ならよく理解できます。山に入る際に小刀（ナイフなど）を持ってきた人は自然とその時のリーダーになつていたよう思います。当時私はそのようなものを持つていなかつたので内緒でナタを持ち出していました。ツタや竹などとりあえずなんでも切つていました。手を切れこぼれし、コッソリ元の場所に戻しても後で見つかり怒られたものです。それでも懲りずに同じことを繰り返していました。手を切ることもしそつちゅうで、そういう時に絆創膏を持つてきた人は救護班と呼ばれ感謝されました。山に入る目的があつたわけではありませんでしたが、自分たちのグループを「川口浩探検隊」と呼び、大げさに驚いたり叫んだり、それだけで楽しかったのを覚えていました。

では二十万円を超すものもあり、その金額によつて様々な機能が付いてきます。大きさも幅十センチを切る小さなものまであります。ほとんどのものはスマートフォンで簡単に操作でき、手軽に遊ぶことができるようです。テレビを見ていると、上空からスポーツ選手の様子を撮つたり、動物の群れが走る姿を撮つたり、通常では撮影不可能な断崖絶壁、滝、清水の舞台を外側から撮るなど今まで見ることができなかつた映像を見ることができるようになりました。その反面、盗撮や爆弾テロなど犯罪に使われる可能性が出てきました。便利なものは時には怖い存在になつてしまいますが、

子どもの頃、陣地を取り合う遊びはいくつかありました。たいていは校庭や公園の一角でていたものですが、最近はなんと世界中が常に陣地の取り合いをしているのです。これは政治的な話ではなく、非暴力的な本当の

遊びなのです。普通と違うのは、スマートフォンなどの携帯端末で現在自分がいる場所の地図を表示させながらするということ、あくまでも現実の世界には陣地は見えず、世界地図の中に陣地を作つていくのです。

簡単にルールを説明すると次の通りです。

①世界中で2つのチームしかないのどちらかを選びます。

②新しく認定された地点（神社仏閣、郵便局、駅などの公共の建物、史跡、銅像など歴史的価値のあるもの、その他コンビニなど様々）または敵から奪い取った地点を最低でも3ヶ所用意し、それぞれを結び陣地を作る。（実際に「新田駅」などへ移動する必要があります）

③陣地を拡大しながら、守り続ける。

世界中が同時に行つてているので、国を超えて陣地が作られていることもあるようです。実際に外に出なければならぬゲームなのです

最近の遊びは人間と人間の間に機械が割り込んでいることが多いようです。このような状態をどのように捉えるかは人それぞれですが、たまには童心にかえつて機械を使わないで遊ぶのもいいかもしれません。あの頃はよかつたなあと思い出すことはとても幸せなことではないでしょうか？

化け猫の話

北村小蝶

我が家では猫を四匹飼っています。うち二匹は物置に住みついていた半野良が産んだ猫で、あとの二匹は私が新生園で拾つた猫です。猫が好きで飼い始めたわけではありません。もらしい手がいなかつたので、悩んだ挙句、仕方なく飼い始めた猫たちです。長年犬を飼つていたせいか、猫の何を考えているか分からぬ、そつけない感じが苦手でした。しかし一緒の部屋で暮らしてみると、なんとも言えずかわいいものです。

毎日、夕方になると「みやお、みやお」と

鳴き続けて私が帰るのを待つています。帰つてドアを開けた途端、ジャンプして私の肩に乗つて甘えてきます。寝る時は必ず私のベッドの足元に長く伸びるので、私は足を伸ばして寝ることができません。魚が大好物で、気を抜くと台所のテーブルの上の焼き魚を泥棒されてしまいます。

猫なのに、ドアを開けるのが得意で、何度か部屋から脱走したこともあります。ジャンプしてドアノブにぶら下がり、ドアを開けるのです。引き戸の場合は鼻先で押し開けます。

わが飼い猫ながら賢いものだと感心していらっしゃる。ドアを開けるのは普通の猫、開けて閉めるようになつたら化け猫だ、というお話を聞きました。

化け猫といえば、猫が夜中にほつかむりをして踊っている印象でしたが、肥前国佐賀藩の、鍋島の化け猫騒動というのが有名だそうです。

佐賀藩当主の鍋島勝茂は、いつも臣下の龍造寺又一郎に囲碁の指南をさせていたそうです。あるとき龍造寺又一郎は、主・勝茂の機嫌を損ねて惨殺されてしまいます。それを知つた又一郎の母は、かわいがつていた猫に悲しみを語り、自害します。この母の血を舐めた猫が化け猫となり、城内に入り込んで毎晩のように勝茂を苦しめますが、勝茂の忠臣である千布本右衛門が化け猫を退治して怪異は終わつたということです。

この化け猫伝説には諸説があつて、登場人

物等が違つてることもありますが、概ね、龍造寺家の猫が鍋島家へのうらみをはらすため化け猫になつて復讐をしようとするものの、最終的には退治される、という点で共通しています。

草木も眠る丑三つ時、夜な夜な化け猫が現われて、行灯の油をピチャリ、ピチャリと舐めている…そのシーンを想像すると、気味が悪いなあと思います。しかし、この怪談には裏話があるようです。

化け猫伝説では、佐賀藩の当主は鍋島家となつています。しかし実は、もともとの当主は龍造寺家だつたらしいのです。龍造寺家の当主は病気がちで政治を執り行うことができず、重臣である鍋島家が国政を掌握することになりました。次第に鍋島家は豊臣秀吉や徳川家康にも認められるようになりますが、これに納得できないのが本来の当主・龍造寺家です。当主とは名ばかりとなつた龍造寺家は

絶望し、自らの手で妻を殺し、乱心の末に死んでしまいます。かくして、佐賀藩の実権は龍造寺家ではなく、鍋島家が握ることになります。ところが、無念の死を遂げた龍造寺家当主が、夜な夜な亡靈となつて白装束を着て、馬にまたがり城下を駆け巡つてているという噂が立つようになります。この話が元になり、龍造寺の猫が鍋島に化けて出る、という怪談話にまで発展したらしいのです。

このお家騒動についても色々な説があるらしいのですが、はたして、怪異が猫の仕業とされたのは何故なのか気になります。慕つていた飼い主の仇討ちをするのであれば犬の方が、「忠犬」という言葉もあるように、適しているようにも思います。

これは、あくまで私の想像なのですが、猫または化け猫といった猫の話が多いのは、昔から猫と人間の距離が近かつたことの表れではないでしょうか。例えば、古来犬は人間に

忠実で、言うことを聞いたり人のために働いたりします。しかし躰ができるっていない犬や野犬は、人を襲うこともあつたかもしれません。対して猫は今も昔も、ただそこに居るだけ、です。人の役に立つこともせず、人間に危害を加えることもなく、人と一定の距離をとり、共生してきました。かわいいけれど獰猛で、いつも一生懸命で、間抜けです。昔の人もそんな猫の姿を見ていたからこそ、「猫に小判」「猫の手も借りたい」「猫をかぶる」などのユニークな表現が生まれたのでしょうか。

なんにせよ、化け猫の話は、妖魔よりも人間同士のどろどろした感情のほうが恐ろしいことを物語つてているように思います。

そして、たかが猫、されど猫。かわいいだけではありません。私達は大切にしていかないと化け猫の祟りがあるかもしれませんね。

新生園花火大会

－ 平成27年7月25日(土) －



元副園長・森芳正先生に
感謝状

入所者の慰問と地域住民との交流を深めることを目的にして、ご厚意により平成11年より夏祭り・花火大会の開催に尽力されました

